

接触場面における協働過程の変化に関する考察

— 母語話者の意識的処理と行動を中心にして —

熊井浩子

【要旨】

NSとNNSのよりよいインターアクションを可能にするためには、両者が対等な立場に立った協働過程が不可欠である。本研究ではケース・スタディーとして、同一の日本語NS (J) とNNS (T) の複数にわたる会話場面およびフォローアップ・インタビュー等を分析し、インターアクションの回を重ねることで言語ホストであるNSのNNSの日本語に対する捉え方やインターアクションに対する意識面での処理、および実際の配慮行動がどのように変化していくのか、またそれをNNSはどのように捉えているのかを考察した。意識面の処理では、Jは、最後までNNSとの会話で有意に高いとされる「相手の理解援助」及び「相手の発話促進」に対する配慮行動を強く意識していたが、最終的にはNS同士の会話と同様に「感情抑制」が大きく増加し、相手がNNSであっても、会話の回数を重ねるうちに、相手の感情や意図をつかんで、お互いの関係を良好に保つことに意識が払われるようになっていく可能性を示唆している。実際の会話の分析でも、Jの情報要求とTの情報提供によって進められていた一方的な会話から、次第に会話維持の管理が双方の協働で進められ、NS同士の会話同様、相手の感情に配慮し合いながら情報を深め合う真のインターアクションへと発展していったとことがわかる。一方、英語や文字の知識を十分活用して、理解を助けるというストラテジーや言語ホストの役割についての意識の違いなど、最後まで解消されない点もあった。ともに学ぶNSとNNSが、接触場面という視点から互いのコミュニケーションを客観的に振り返り、よりよいコミュニケーションのために協力し合って、豊かな人間関係のネットワークを築いていくこと、そしてそれを通じて、多文化社会の担い手として人間的な成長を遂げていくことが非常に重要であり、それを自律的に学んでいくことができるような大学等における教育プログラムの構築と協働過程達成のための支援が不可欠であろう。

【キーワード】 接触場面 インターアクション 言語ホスト 意識的処理 行動 変化
教育プログラム

1. はじめに

異なった文化的・言語的背景をもつ母語話者（以下、NS）と非母語話者（以下、NNS）の接触場面におけるよりよいインターアクションを可能にするためには、NNSが常にNSの規範に合わせることを前提とし、そうでないものを間違いあるいは逸脱として否定的に捉えるのではなく、両者が対等な立場に立ってお互いに適切な配慮行動を行い、伝え合い、理解し合うための協働過程が不可欠である。こうした視点から、本研究ではケース・スタディーとして、同一の日本語NSとNNSの複数にわたる会話場面および録画を見ながらのフォローアップ・インタビュー（以下、FUI）等を分析し、インターアクションの回を重ね

ねることで言語ホストである日本語NSのNNSの日本語に対する捉え方やインターアクションに対する意識面での処理、および実際の配慮行動がどのように変化していくのか、またそれをNNSはどのように捉えているのかを考察する。それによって多文化共生社会に向けて、日本語NSおよびNNSに対し大学等においてどのような教育プログラムが求められているのかを考える。

2. 調査の方法

調査の概要は下に示したとおりである。まず、日本語NSである日本人大学生1名（以下、J）とNNSであるタイ人留学生1名（以下、T）の20分程度の自由な会話を録画する。会話終了後、JにはNNSとの交流経験や今回の相手の日本語のレベル（以上、1回目の調査のみ）、録音が気になったかとともに、今回の会話で相手に対してどのような配慮行動を行ったか、一方Tには、NSとの交流経験や自分の日本語のレベル（以上、1回目の調査のみ）、録音が気になったか及び、相手が自分に対してどのような配慮行動を行っていたかを、それぞれ質問紙（資料参照）^{註1}で尋ねた。その後会話の録画を見ながら、一人ずつFUIを行った。調査は約1ヶ月の間隔をおいて4回行われ、それぞれの会話の最初の5分をカットした15分間のデータを分析の対象とした。なお、2回目に関しては質問紙調査及びFUIは行わず、4回目に関しては、それぞれのFUIのあと、J・T同席でのFUIも実施した。

〈調査概要〉

実施時期：1回目2006年12月（以下、調査1）、2回目2007年1月（以下、調査2）、
3回目2007年2月（以下、調査3）、4回目2007年3月（以下、調査4）

調査対象：J（NS）：大学1年 10代・日本出身・男性

T（NNS）：留学生 20代・タイ出身・男性

実施場所：静岡大学国際交流センター教室・小会議室

調査の基本的流れ：会話 → 質問紙記入 → FUI

Tは発音や文体の適切さという点ではやや問題が残るが、大学での勉学生活が可能な上級レベルの日本語力を有している学生である。二人は、一回目の調査の時点では初対面である。以下、どのような配慮行動を行ったかというJの意識面での処理と、実際の会話データを情報要求と話題の提示、ポーズや繰り返し及び言語的・非言語的調整という観点から分析した結果とを比較・検討していく。

3. Jの意識面での処理の変化とTの印象

一二三（2002）は、NSが接触場面及び母語話者同士の場面で行う意識面での処理を、「理解援助」（第1因子）、「率直さ」（第2因子）、「曖昧さの受容」（第3因子）、「感情抑制」（第4因子）、「雰囲気緩和」（第5因子）及び「相手の発話促進」（第6因子）という6つの因子に分け、対話者がNNSである場合には「理解援助」（第1因子）が有意に高く意識され、相手が正確に理解できるように様々な言語調整を行いながら話すことが特に重要で

あると捉えられていることを明らかにしている。この場合、NNSの日本語力によるNSの意識面での処理に有意差は見られず、このことから一三三（同上）は、非母語話者は非母語話者としてステレオタイプ化され、先入観で評価されやすい、つまり、NSが相手の日本語レベルを客観的に配慮しながらそれに合わせて意識面の処理を調整することはないと結論づけている。逆に対話者がNSである場合には、「率直さ」（第2因子）及び「感情抑制」（第4因子）が有意に高く意識され、自分の感情をコントロールしながら、相手の感情や意図を察知して、相手との関係を良好に保つことを強く配慮しているという。「曖昧さの受容」（第3因子）、「雰囲気緩和」（第5因子）、「相手の発話促進」（第6因子）については相手がNSかNNSかで有意差が見られなかったということである。

今回の調査では、この一三三（同上）に基づいた質問紙^{註2}を作成し、JにはTとの会話に対して配慮した点に、TにはJが配慮していたと思われる点にそれぞれ○をつけてもらった。内容及び結果は表1のとおりである。なお、資料のとおり、実際の調査での質問の順番は因子ごとではなく、ランダムに並べてあるが、集計の際に因子ごとに並べ替え、わかりやすいように番号も順番に1から45につけなおした。

表1 Jの意識面での処理

	調査1	調査3	調査4	因子
1. 丁寧体（デス・マス調）で話す	○●		○●	第1因子 相手の理解援助 (NNSで有意に高い因子)
2. 相手の言語のレベルに応じて、語彙・文法・スピードなどの言語的な調整をする	●	●	●	
3. 流行語・俗語などはなるべく使わない	○●	●	○●	
4. はっきり正しく(標準的に)発音する	○●	●	○●	
5. 複雑な内容・背景を多く説明しなければならない内容は避ける				
6. 相手の言語のレベルを早く知ろうとする				
7. 文法的に正しく話そうとする(例.助詞などは省略しない)			○	
8. 身振り・ジェスチャーを多くする	○		○	
9. 相手が知っていそうな話題を選んで話す	○●	○●	●	
10. 表情を豊かにしようと努める	○			
11. 相手が知らなそうな語彙でもあえて使ったりして相手の語彙が豊富になるような配慮をする			●	
12. 相手が理解しているか注意する	●	●	○●	
13. わからないときは適宜絵や文字を書いたり、英単語などを使う				
14. 中立的立場で意見・感想を言う(偏った意見・感想は控える)	●		●	
15. 相手の言語上の間違いははっきり指摘し直す				
16. プライベートな話題は避ける				

17. 時々話の流れを明瞭にする（要約したり、要点を整理する）	●			
18. 相手もたまた話していても途中で口をはさまず、最後まで聞いてあげようとする		●	●	
19. 自分の意見は明確に伝える	●	●	●	第2因子 率直さ (NSで有意に高い因子)
20. 独自の意見を言う				
21. 自分の感想は明瞭に伝える		●	●	
22. 納得いくまで話し合う	●		●	
23. 自分が理解しているかいないか相手にはっきり示す	●	●	●	
24. 多少理解できなくても気にせず聞く				第3因子 曖昧さの受容 (有意差なし)
25. 多少理解してもらえなくても気にせず話す				
26. 言語的な間違いは、話の内容がわかれば直さない	●	●	●	
27. 自分の感情をコントロールする	●			第4因子 感情抑制 (NSで有意に高い因子)
28. 相手の感情をすばやく察知するよう努める	●	●	○●	
29. 相手と自分との関係を意識する		●	●	
30. 意見が対立しそうな話題は避ける	●			
31. 相手の意図を推量しながら聞く	●	●	○●	
32. 相手が話しているときはあいづちを多くしたり、頻繁にうなずいたりする	○●	●	○●	
33. つまらなくてもおもしろそうに聞く				
34. 相手の内容上の誤りは婉曲に訂正する				第5因子 雰囲気緩和 (有意差なし)
35. 相手の使った語彙を自分も積極的に取り入れて使う			●	
36. 相手を楽しませようとする	○●	○●	●	
37. リラックスした雰囲気を作ろうとする	○		●	
38. にこやかにする	○	○●	○●	
39. 相手の話がわからないときは聞き返し、わかるまで努力する	●	○		第6因子 相手の発話促進 (有意差なし)
40. 相手の話にならず何らかの反応・応答をする	○●	○●	○●	
41. 論理的に話す				
42. 相手の意見を尊重する		○●	○	
43. 相手が理解していないようなときはきちんと確認し相手が理解できるまで努力する			●	
44. 相手の目を見る	○●	○●	○●	
45. 具体的に話す	○●	●	●	

○：Jが選択したもの ●：Tが選択したもの

これをパーセンテージで見ると^{注3}、Jには調査1と4で「相手の理解援助」(第1因子)、全調査で「相手の発話促進」(第6因子)に対する配慮行動が強く意識されていることがわかる。一方「感情抑制」(第4因子)は調査1では1項目、調査3では意識されていなかったが、調査4では3項目、43%に増加している。一方、「雰囲気緩和」(第5因子)は回を重ねるたびに減少している。「率直さ」(第2因子)、「曖昧さの受容」(第3要因)は全調査で意識されていなかった。

表2 因子別パーセンテージ

		回答	調査1	調査3	調査4
NNSで有意に高い因子	第1因子 相手の理解援助	J	6/18 33.3%	1/18 5.6%	6/18 33.3%
		T	8/18 44.4%	6/18 33.3%	9/18 50.0%
NSで有意に高い因子	第2因子 率直さ	J	— —	— —	— —
		T	3/5 60.0%	3/5 60.0%	4/5 80.0%
	第4因子 感情抑制	J	1/7 14.3%	— —	3/7 42.9%
		T	5/7 71.4%	4/7 57.1%	4/7 57.1%
有意差なしの因子	第3因子 曖昧さの受容	J	— —	— —	— —
		T	1/3 33.3%	1/3 33.3%	1/3 33.3%
	第5因子 雰囲気緩和	J	3/5 60.0%	2/5 40.0%	1/5 20.0%
		T	1/5 20.0%	2/5 40.0%	4/5 80.0%
	第6因子 相手の発話促進	J	3/7 42.9%	4/7 57.1%	3/7 42.9%
		T	4/7 57.1%	4/7 57.1%	4/7 57.1%

このうち、「理解援助」は、相手の言語的レベルに合わせ、言語面での調整を配慮する項目(表1、質問1から4及び6・7)、非言語面での調整を配慮する項目(表1、質問8・10・13)、話題や内容面の調整を配慮する項目(表1、質問5・9・14・16)に分けられているが、この三つの項目に対するJの意識は表3のとおりである。この3つはパーセンテージではそれほど差はないが、FUIでJはたびたびNNSと話すときにはモデルとなるような「正しい日本語」を使うことを心がけていると述べている。FUI 1のときに、Tの日本語はとても上手だと評価し、こちらの言っていることが伝わらないということもなく、すんなりと会話ができたと話していることから、Jのこのような言語面での配慮の多くは、わかりやすさというよりは、学習者の手本となるような日本語を話すべきだという意識が強かったためであると言える。これは調査4でも調査1と同じ「正しい日本語」を話すという言語面での調整が続いていたことからもうかがえる。

表3 Jによる理解援助

	調査1	調査3	調査4
言語面の調整	3/6 50.0%	— —	4/6 66.7%
非言語面の調整	2/3 66.7%	— —	1/3 33.3%
話題・内容面の調整	1/4 25.0%	1/4 25.0%	— —

一方、「4. はっきり正しく（標準的に）発音する」は調査1・4でも意識されていたし、FUI 3でも、声を大きめにして、発音に気をつけていると述べていることから、発音面では相手の理解しやすさを意識した調整が最後まで続いていたことがわかる。また、非言語面での調整でも、調査1・4で「8. 身振り・ジェスチャーを多くする」ことを意識していたということである。このように、はっきり話すこととジェスチャーについては会話を重ねても調整が行われていたのに対し、「9. 相手が知っていそうな話題を選んで話す」は調査1と3のみで選択されており、最初はTにとって話しやすいと思われる話題を選択するように心掛けていたことになるが、このような発話内容面での調整は調査4では意識されていない。

また、一二三（同上）ではNS同士の会話で有意に高いとされている「感情抑制」（第4因子）が、今回は調査4で43%と、大きく増加しているが、このうち調査4で初めて意識されたのは、「28. 相手の感情をすばやく察知するよう努める」と「31. 相手の意図を推量しながら聞く」で、第4因子の中でも、特に相手の感情や意図の把握が意識されるようになっていったことがわかる。これは相手がNNSであっても、会話の回数を重ねるうちに、NS同士の会話と同じように、内容の伝達そのものだけでなく、相手の感情や意図をつかんで、お互いの関係を良好に保つことに意識が払われるようになっていく可能性を示唆している。コミュニケーションの回数を重ねることによるこのようなNSの処理の変化が、コミュニケーションに問題ない日本語力であると受け止められるNNSの場合に限るのかどうかは今後さらに詳しい調査が必要である。なお、「雰囲気緩和」（第5因子）が減少していった理由は明らかではないが、特に意識しなくてもいい雰囲気で会話が続いていったためではないかと考えられる。

一方Tは表2のように、どの因子に対してもJが配慮を示してくれたと感じている。このうち、「率直さ」（第2因子）が調査4で20ポイントアップし、「雰囲気緩和」も初回の20%から次第に増え、最終的には80%と非常に高くなっている。逆に「感情抑制」が第1回目と第3回目の間で14ポイント減っている。これらは、いずれもJ自身の意識とは食い違っているが、FUI 4でTは、調査1ではJがあまり自分のことを話さず、話題も定番のものだったのが、次第に本当の友達の会話になっていったと感じたと報告していることから、回を重ねるうちに、感情のあまりない表面的で一方向的な会話から、次第にいい雰囲気の中での心の通った会話になり、TがそれをJの配慮によるものであると感じていることがうかがえる。これ以外の因子についてはそれほど回数による変化はない。

以上、Jの意識面での処理の変化とTの印象とを検討したが、この両者は必ずしも一致していないことがわかる。これは、Jが意識せずに行っている行動をTがJの配慮行動と受け止める場合もあるためであろう。

4. 実際の会話の分析

前節では、Jの意識面での処理について考察したが、本節では会話データの分析を基に、そのようなJの意識がどのような形で実際のインターアクションに反映されていたのか、それがJ・Tにどのように感じられていたのかを考える。

4. 1. 情報要求と話題の展開

一二三（同上）は日頃よく話す相手との会話におけるNS及びNNSの発話内容面での処理を分析し、NSとNNSとの会話ではNSはNS同士の会話に比べて情報要求を多く行うが、情報提供はあまり行わないのに対し、NNSはNSに対して情報要求はほとんどせず、その反面情報提供がさかんに行われることも明らかにしている。一方NS同士の会話では情報要求はあまり行わず、自分から情報提供を行って情報を共有しようとしているということであった。今回の調査においても、表4のように、Tの発話では一貫して情報要求が非常に少ないことがわかる。この点は一二三の指摘と一致している。これに対し、Jは調査1・2の段階では情報要求がきわめて多い。特に調査1の時点では119ターン中49ターン、4割が情報要求となっており、例1のように、矢継ぎ早に質問を投げかけるような会話が多く見られた。しかし、これが調査3、4と進むにつれて次第に減少し、調査4では9回、全ターンの7%のみと、非常に少なくなっていることがわかる。

表4 それぞれのターン中の情報要求のターン

	調査1	調査2	調査3	調査4
J	49/119 41.2%	31/91 34.1%	21/118 17.8%	9/126 7.1%
T	4/114 3.5%	3/92 3.2%	5/119 4.2%	8/114 7.0%

〈例1〉

- 1.132 J: 冬休みはどっか、行きますか?
 133 T: 明日、東京へ行きます。
 134 J: なにしに?
 135 T: 買い物
 136 J: 買い物? 服とかですか?
 137 T: はい。
 138 J: 東京、ひとりでですか?
 139 T: ふたりで。
 140 J: ふたりで。 だれとですか?
 141 T: Kさん

調査1ではこのような情報要求の約4割（20/49件、40.8%）は話題の導入や展開のストラテジーとして用いられる。そこで、調査1において話題の開始がどのような形で行われたかを見てみると、表5のように話題の小区分は25、そのうちJが提示した話題は21件で全体の約84%、Tが提示した話題は4件、16%のみであるが、J開始話題のうちの20件は例2のようにJが情報要求を行い、Tがそれに応えて情報提供する形で進められていることがわかる。Jの情報提供で開始された話題は1件だけであった。T開始話題は4件で、日本語学習を始めた動機に関連して出されたタイでアニメの翻訳をやっていたという話題と日本人のクリスマスに関する話題の2件は情報提供や同意要求で開始され、あとの2件はそれに先立つJの情報要求を今度はTがJに対して行っている。

話題の展開については、Jが提示した話題21件のうち、13件は、前の話題から何らかの形で展開されたものであると考えられるが、残りの8件は、外国語学習経験の話題の次にいきなり兄弟の有無の話題になるなど、関連性のない話題変換が行われている。全233ターン中話題が25ということは、平均で9ターンに1回は話題が変わっていたことになる。初対面のときには相手がどんなことに興味があるかもわからないため、共通の話題を探そうとして、話題の転換が多くなることは接触場面に限らず、NS同士の会話でも起こりえることであるが、調査1で話題がこのように頻繁に変化し、そのほとんどの話題がJによって開始された情報要求とそれに伴うTの情報提供という形で進められていたことは注目に値する。

表5 調査1における話題開始状況とその機能（14の大きな話題中の小話大25）

話 題	その小区分	J話題開始	J情報要求	T話題開始	T情報要求
サークル	Tのサークル	◎	○		
	Jのサークル			○	○
日本語学習の動機 ↓ アニメ	日本語学習の動機 (アニメ)	◎	○		
	日本のアニメ	○	○		
	アニメの翻訳			○	
英語	英語の能力	○	○		
	タイの英語教育	○	○		
タイの宗教	タイの宗教	◎	○		
	お坊さんの体験	○	○		
	お坊さんのタブー	○	○		
クリスマス	Tのクリスマス	◎	○		
	Jのクリスマス	○			
	タイのクリスマス	○	○		
	日本のクリスマス			○	
冬休みの予定	Tの冬休みの予定	◎	○		
	Jの冬休みの予定	○	○		
旅行	Tの旅行経験	○	○		
	雪・寒さ	○	○		
バイト	Jの冬休みの予定 (バイト)			○	○
	Tのバイト経験 (来たばかり)	○	○		
Tの来日・帰国時期		○	○		
日本で困ったこと (若者の話し方)		◎	○		
タイ語		◎	○		
他の外国語学習経験		○	○		
Tの兄弟		◎	○		
全小話数に占める割合		21/25 84.0%	20/21 95.5%	4/25 16.0%	2/ 4 50.0%

◎：関連性のない話題転換

〈例2〉

1. 10 T：今、一年生？

11 J：一年生です。今研究とかも別がないし、まだ、(くうなずく) 忙しくないですね。

12 J：どうして、日本語を、勉強しようと思ったんですか？

13 T：えー、実は最初は日本のアニメを見て・・・

このような話題の変化や情報要求の多さに対しFUI 1や質問紙でJは、タイのことに関心があり、いろいろ聞きたかったので、たくさん質問し、積極的に話した、その国の特徴や文化の話をするのはおもしろいと述べている。また、相手が質問をしてくれたし、話したいという姿勢があるから話しやすかった、話題については、お互いが知っていることや人についてだったので話しやすかったと述べている。Jが「9. 相手が知っていそうな話題を選んで話す」ことを心掛けていたことは3でも触れたが、Jはこのように相手が話しやすそうな話題を選んで、どんどん質問し、相手の会話参加を促すという方法で言語ホストとしての役割を担っていたことがわかる。

表6 話題数

	話題
調査1	14
調査2	3
調査3	7
調査4	7

一方Tは、Jは聞かれない場合には自分のことを話さず自分だけが聞かれたような気がした、インタビューのようだったと述べている。また、自分も相手のことを聞きたいと思ったけれど、すぐ次の話題に移ってしまうので聞くチャンスがなかったと話している。ただ、そのことを否定的に捉えているわけではなく、自分も以前大学の授業で日本人にインタビューしたことがあるが、今回はその逆で面白かったと答えている。また、日本人と話すときは向こうから質問されることが多いので、このような話し方には慣れており、話題のいくつかについても、日本語学習の動機など、いつも日本人が必ず聞く話題と捉えている。このような感想をTが抱いていることにJは全く気づいていなかった。日本語教科書の会話には、日本人が一方的に質問し、もう一方の外国人はただそれに答えるだけというパターンが多いことが指摘されてきたが、まさに調査1では、インタビューしながらJが一方的に会話をリードしていた様子が浮き彫りになっている。しかも、話題についても文化や日本語学習についてという接触場面での定番的な内容であった。

しかし、表6のように、調査1での目まぐるしい話題変化に対し、調査2から4では、話題の数はぐっと少なくなる。例えば調査2では、大きな話題は3つのみで、大きな話題転換は1回のみである。調査3でも大きな話題は7つだが、最初の5つは前の話題から発展していったもの、あとの2つも関連のある話題なので、大きな話題転換は1回のみ、調

査4も大きな話題は7つであるが、最初の3つは関連があり、次の4つの話題も前の話題から次第に発展していったものである。

調査2以降は、少数の話題でも十分会話がつながっていったので、次々と話題を変える必要がなくなったといえる。このことは特に調査4では表1のように、Jの意識面の処理でも話題に関する調整が行われていないことから裏付けられる。この点をFUI 3では、Jが質問するだけでなく、自分のことも話すようになった、FUI 4では、Jは次に何を話せばいいかと心配しないで話せるようになった、Tは、話せば話すほど話題が増えてきて楽しかったと答えている。最初は共通の話題もなく、国際交流的な話題の羅列で、一二三（同上）の指摘のとおりJの情報要求中心で進められていった会話が、いったん知り合いになって、お互いの興味や趣味、予定がある程度わかるようになり、同時に共通の知り合いというネットワークができたことにより、話題が量的にも質的にも広がってJの情報要求が減っていき、より自然な心の通った会話になっていったことがわかる。このことは3で述べたように、調査4の時点でJが意識的処理においてもNS同士の会話で有意に高いとされる相手の感情や意図に配慮した調整を行っていたという結果とも合致しており、発話内容という点でも、回を重ねるごとに次第にNS同士の会話に近づいていく可能性を示唆しているといえるであろう。

4. 2. ポーズ

会話中、通常の話者交代以上の沈黙があり、会話が止ったと判断されたことが何回かあった。特に調査1では2秒以上のポーズが29回となっている。それがどちらのターンで生じ、どちらがその次のターンを取ったかを見てみると、表7のように、Tのターンのあとに沈黙があって、Jが次のターンを取る（T→J）が最も多く、次にJのターンのあとにポーズがあって、Jがターンを取る（J→J）、Tのターンのあとにポーズがあって、Tがターンを取る（T→T）、Jのターンのあとにポーズがあって、Tがターンを取る（J→T）の順であった。このように、29回中21回、7割以上はJがターンをとっていることがわかる。表8のように、その21回中14回は新しい話題の開始・展開のための発話であるが、そのうち10回はTに対する情報要求となっている。一方、Tが長いポーズ後のターンを取る場合はコメントや説明追加が多かった。

表7 2秒以上のポーズ出現回数とターン

	ポーズ出現数	J→J	T→J	Jターン取得	J→T	T→T	Tターン取得
調査1	29	8/29 27.5%	13/29 44.8%	21/29 72.5%	3/29 10.3%	5/29 17.2%	8/29 27.5%
調査2	6	— —	3/6 50.0%	3/6 50.0%	2/6 33.4%	1/6 16.6%	3/6 50.0%
調査3	16	1/16 6.3%	6/16 37.5%	7/16 43.8%	3/16 18.8%	6/16 37.4%	9/16 56.2%
調査4	24	12/24 50.0%	5/24 20.8%	17/24 70.8%	5/24 20.8%	2/24 8.3%	7/24 29.2%

通常の会話では、今回の調査のように、話すことのみを目的として話すことは少なく、食事をしながら、歩きながら、というように、何かしながら話すことが多い。そのようなときにはずっと話し続ける必要はなく、話が途切れたときには飲み物を飲んだり他のところを見たりなど、別の何かをして間をもたせることができる。それに対し、今回の調査では、それがむずかしいため、通常の会話以上に会話が途切れるのを避けようとしたことが予想されるが、その場合にJが沈黙を埋めるために、どんどん話題を導入して、積極的に会話をリードしようとしていたことがうかがわれる。一方Tの方は、沈黙後に新しい話題を導入することはなかった。

表8 ポーズ後取得ターンの発話内容

	Jターン取得			Tターン取得			
	話題開始・展開	コメント・情報追加	確認	話題開始・展開	情報提供	コメント・情報追加	確認
調査1	14/21 66.7% (情報要求10回)	5/21 23.8%	2/21 9.5%	— —	2/8 25.0%	5/8 62.5%	1/8 12.5%
調査2	3/3 100% (情報要求3回)	— —	— —	— —	— —	3/3 100%	— —
調査3	5/7 71.4% (情報要求5回)	1/7 14.3%	1/7 14.3%	— —	1/9 11.1%	5/9 55.6%	3/9 33.3%
調査4	2/17 11.8% (情報要求2回)	15/17 88.2%	— —	1/7 14.3%	1/7 14.3%	5/7 71.4%	— —

調査2では、表7のように長いポーズの数は6と、ぐっと少なくなるが、沈黙後にターンを取った回数はJとT同数となる。Jがターンを取った3回は全て依然話題展開のためのTに対する情報要求となっている。一方、Tがターンを取った場合の3回は全てコメントや説明追加となっている。調査3では、沈黙が16とやや増えるが、Jがターンを取ったのが7回、Tが9回と、Tのほうが沈黙後にターンを取る回数がやや多くなっている。Jがターンを開始した7回中5回は新しい話題の開始・展開のための情報要求となっているが、ここでも、Tがターンを取った場合には、コメントや情報追加及び確認が多い。調査4では、沈黙24回中、Jがターンを取った回数は17回、Tが7回と、再びJのターン取得が多く

なるが、それまでと違って、話題開始・展開のための情報要求は2回のみで、15回はコメントや情報追加となっている点が注目される。

このように調査1ではほとんどのポーズ後のターンを取得したのはJで、その大部分が新たな話題や話題の展開のための情報要求であったが、調査4になるとそのような情報要求はぐっと減り、大部分はコメントや情報追加となっている。即ち、調査3までのJは回数増減はあるものの、Tに新たな質問をすることで沈黙を埋めようとしていたが、調査4になると、それまでの話題に情報を付け加えたり、自分の意見やコメントを述べることで、話を深めようとしていることがわかる。Tも、調査2から3になると、沈黙後のターン取得が増えてくる。調査2からは沈黙の管理をJに任せるのではなく、コメントや情報追加及び確認などによって積極的に会話維持に貢献していることがわかる。このように、最初はJがもっぱら担っていた会話を進めるための管理が、次第にJ・Tの協働で進められるようになっていったことがうかがわれる。

4. 3. 繰り返し

調査1におけるJの発話は、表9のとおりその直前のTのターンでの発話に対する繰り返しが35回、Jの総ターン数は119回であるから、3.4回に1回と、きわめて多い。そのうち、Tの発話に対する驚きと受け取られるものと聞き返し・説明要求がそれぞれ3件、考えながら2件、同意と相手の発話の先取りが各1件、訂正が1件で、この11件を除く24件は情報伝達上の特別な機能はなく、あいづち的に用いられているが、その直前でTのターンが終了していることから、あいづちではなくJのターンであると考えられる。質問紙調査では「32. 相手が話しているときはあいづちを多くしたり、頻繁にうなずいたりする」、「35. 相手の使った語彙を自分も積極的に取り入れて使う」、「40. 相手の話にならず何らかの反応・応答をする」がこれに関連した項目であると思われるが、調査1でJは32・40を選択しており、積極的に聞いていることを示すJの言語ホストとしての意識が反映された行動であることがわかる。

表9 Jにみられた繰り返し

	繰り返し	あいづち的繰り返し
調査1	35	24 68.6%
調査2	21	9 42.9%
調査3	11	7 63.6%
調査4	19	8 45.5%

〈例3〉

- 1.1 J: サークル。サークルとかやっています?
- 2 T: やってないです。
- 3 J: やってない。

繰り返し自体は協調的な会話のスタイルであると言えるが、そのあとに、Jのコメント

や情報提供が伴わないと、受け身の当たり障りのない会話という印象を与えることもあるだろう。このような繰り返しの多さがFUI 1でTが述べた、JがTのことを聞くだけで、自分のこと話さないと感じた原因の一つであった可能性もある。また、FUI 4でTは、Jにもっと自分の意見を言ってほしかったという趣旨のコメントを述べているが、これも、繰り返しの多さが一因であると思われる。Jは自分のこのような話し方の特徴に気づいていなかった。

しかし、このようなあいづち的な繰り返しは調査2では、21件中9件、調査3では11件中7件、調査4では19件中8件と、いずれも調査1に比べて少なくなっている。これも先の話提供や情報要求が次第に減っていったのと同じように会話を重ねることでJの行動に見られた変容の一つであるといえるだろう。

4. 4. 言語・非言語面での調整

先にも述べたように、Tは上級レベルの日本語話者であり、Jの発話はほとんど問題なく理解しているが、発話の面では発音や話すスピード、音変化や文体の選択などに外来性を感じさせる。文法や語彙の選択にも一部間違いが観察された。しかし、Jは一貫してTは非常に日本語力が高いと捉え、逸脱をほとんど留意していないか、留意したとしてもほとんどそれを調整していない。例えば調査3でも、Tが好きなゲームの話題が続いているが、Jはあまりゲームに詳しくないため、Tの発音上の問題もあってゲームの名前が聞き取れないことがあった。しかし、話の流れがわかれば名前は正確にわからなくてもいいと感じ、例4のように「わかんない」と言いつつも、聞き返すことはせず、どんなゲームかについて話を進めている。

〈例4〉

- 3.83 T：んーん 〈首を傾げながら〉、そのゲームはプレステーション（ママ）1もあって、
でも、その名前はドガボンだけ。でも、これは新しいバージョン。
84 J：えー、わかんない。おもしろいですか？
85 T：けっこう。

これについてJは話に集中していたことと、話が問題なく通じていたためとしている。3で触れたように、J自身は「曖昧さの受容」についての調整は意識していないが、逸脱に対する不留意や不調整はJが大学の留学生支援ボランティアや外国籍児童の学習支援に関わっていて、いわゆる外国人の話す日本語に慣れていたことによるものが大きいと思われる。

調整を行った数少ない例では、例5のように、クリスマスを「気にしない」というTの発話がわかりにくかったため、その言葉を繰り返すことで、上手に説明を要求している事例が観察された。

〈例5〉

- 1.110 J：Christmas & New Yearパーティーみたいな、タイではあるんですか？

- 111 T: 学校では、行いますが、家庭では。
112 J: 別々?
113 T: はい、あんまり、あんまり、気にしない。
114 J: 気にしない。
115 T: あまり大切にしません、(ああ) クリスマス。

また、例6はTが何回か言い直して「クリスト」と言ったのを「キリスト」と訂正している。

〈例6〉

- 1.124 J: 関係ないみたいなの
125 T: はい、日本人はクリスト、クリス、クリスト教徒、
126 J: 教徒、キリスト

さらに、例7では、サークル活動の説明で、「日本語支援」と言ったあと、それを「外国籍の子供に日本語を教える」と言い換えているが、このようにわかりやすい日本語で言い換えている例が2件見られた。しかし、本人は特に意識して行ったわけではないと述べている。

〈例7〉

- 1.4 T: Jさんは?
5 J: 僕は、今、サッカー、やっています。(くうなずく) あと、なんだろ、あの、日本語支援、がいこ、あの静岡に住む外国籍の子供に日本語を教えるっていうサークルやっています。(くうなずく) えへへ。
6 T: 楽しそう。
7 J: ええ、すごい楽しいですよ、子供とかかかわると、楽しい。

また、例8のように、事前に単語の知識を確認している例も調査4で1件だけあった。

〈例8〉

- 4.48 J: なんか、バックパッカーってわかります?
49 T: はい。
50 J: バックパッカーが集まりやすい場所、ていうのは、聞いたことがあります。
51 T: はい。それは、カオサン通り。

一方で調整がスムーズにいかなかった例もある。調査3でゲームの話が出たときに、Tの英語のスペリングの発音が聞き取りにくいなどの場面があった。このときTには指で空に字を書く空書が見られたが、机の上に紙と鉛筆が置かれていたにもかかわらず、Jが実際に文字を書いてもらって理解するという事はなかった。下の例9でも、「列車」が伝

わらないとき、Tは指で列車と書き始めるが、Tに実際に紙に書いてもらうという方法は用いられなかった。また、分析の対象から除外した調査1開始直後にJがTに名前を伝えたとき、それが珍しい名前であったため、Tはなかなか聞き取ることができなかった。しかし、ひらがなで書くか、Tには馴染みのある地名で説明できる漢字3文字からなる名前だったので、漢字を書いたり、例えば「京都の京」のように口頭でも、その漢字を伝えていたら、理解や記憶が容易になったと思われるが、Jは名前を何回かゆっくり繰り返しただけで、そのようなストラテジーを用いていない。

〈例9〉

- 2.176 T: れしゃ
 177 J: 電車
 178 T: れしゃ
 179 J: 電車?
 180 T: れしゃ
 181 J: 電車?
 182 T: れしゃ 〈書こうとする〉 電車じゃなくて列車
 183 J: あっ、列車?
 184 T: はい、すみません。

さらに、例10のように、調査4で、Tが「爆弾」という単語を思い出せず、‘bomb’と言ったのを、Jが「盆」と聞き違い、話が混乱する場面があったが、これについてJは、Tがそこで英語を使うことを予想していなかったからかもしれないと述べている。特にNNSが上級の場合、英語を交えることを予期していないことも多いと思われるので、場合によっては「英語で言うと」のように、メタ言語による前置きなどがあると理解がスムーズになるであろう。

〈例10〉

- 4.74 T: 政府の状態は安定してないけど、安全、安全かな、〈言葉を探して首をひねりながら〉、お正月、bomb、bomb・・・
 75 J: あっ、盆ね。7月、8月。
 76 T: あっ、違う。
 77 J: あっ、1月ぐらい?
 78 T: 爆発がありました。
 79 J: ああ、なるほど、bomb。bombって、盆踊りの盆かと思った 〈笑い〉。すみません。bomb、bombですね。
 80 T: はい 〈笑い合う〉

さらに、同じ例10の冒頭で、Tが「治安」という意味の言葉を知らず苦労していたときに、Jはそのいくつか前のターンでそのことばを使っていたのにもかかわらず、それに気

がつかず、必要なサポートをしていなかった。実はTはJの発話にあったそのことばがわからなかったが、相手の言っていることはわかったため、話の流れを止めたくなかったので、そのまま聞き流したということであった。そのときに、Tが日本語で「治安」に当たる言葉をなんというか聞くことも可能であったと思われる。調査3でも、Tが「アンケート」という言葉を思い出せず、アンケート用紙の形である四角を指で書きながら考えている場面があった。Jは文脈からもTの言おうとしていることがわからなかったのと、相手が生懸命説明している場合にはよく聞くという配慮から、Tが言葉を思い出すのをじっと待っていたが、ここではTの方で英語を用いるか、「出席者が書いた感想やコメント」などと言い換えて、アンケートということばをJから引き出すことも可能であったと思われる。

いずれにしても、お互いの英語や文字の知識を十分活用して、理解を助けるというストラテジーがJ・Tともに今回の調査では十分活用されないか、うまく機能していなかった面があったことがわかる。これは、Tが漢字系でないことやTが英語のネイティブスピーカーでなく、Jもそれほど英語が得意でないことも理由の一つであったと思われる。

また、非言語面での調整では、3で述べたように、Jは調査1・4で「8. 身振り・ジェスチャーを多くする」ことを意識していたと応えているが、下の例11のようなジェスチャーの他に、数字を指で示したり、ご飯を食べる・パソコンを打つ・スキーをするなどのジェスチャーが用いられ、NS同士の会話に比べ、身振り・ジェスチャーが多い印象を受けた。

〈例11〉

1.58 J：坊主にして、〈頭を触るジェスチャー〉頭坊主にして。

ただし、今回のTは日本語力が高かったこともあって、そのジェスチャー自体がTの理解を促進したということは特になかったようである。

4. 5. お互いの意識のずれ

一番大きいJとTでの意識面でのギャップは、当初Jが言語ホストとしてTの会話参加を促進するために、どんどん話題を提示し、Tに情報要求をしているのに対し、Tはそれを普通の会話ではなく、インタビューのようだと思えていた点である。質問したいと思っても、話題がすぐ変わるので、それができなかったとTが感じていたことにJは全く気がついていなかった。Jは言語ホストとして会話を管理する役割を担っていたが、一問一答のようなコントロールされた形ではなく、Tが自由に話せるような方法で会話参加を促すストラテジーが必要であったと思われる。Tの方も、うまくポーズを利用して、ターンをとるテクニックが必要であったと言える。

また、3節でも触れたように、Jは相手がNNSの場合、丁寧に、きちんとした日本語を話すことが大事だと考えており、実際のJの発話も流行語や若者言葉は少なく、丁寧体が基調となっている。さらに、Jの質問は「行きますか?」のように、丁寧体に終助詞カのないスタイルが多かったが、このことについてFUI 3で筆者が質問したところ、それまで意識したことはないが、先生などの目上の人と話すときにそのような言い方をするように

思うと述べている^{注4}。しかし、FUI 4で、JがTの勉強のためにこのような「正しい日本語」を話すように心掛けていたことを聞いたTは、自分は日本語の勉強のために日本人学生と話したいと思っているわけではないので、普通に話してくれたほうが良いと述べている。Tの発話もデス・マス体が基調であり、今回は問題なかったが、場合によっては、自分の日本語力が低く評価されている、またはよそよそしいなどと感じて傷つく場合もあるだろう。

さらに、Tは「今頃の日本人の若者」と違って、Jがゆっくり、はっきり話してくれたと感じていたが、こうしたJの配慮に感謝しながらも、Tはもっと普通に話しても大丈夫だと感じていた。FUI 4でTのこのような感想を聞いて、Jは、3で述べたように「はっきり話す」ことは意識していたが、スピードについては、もともとゆっくり、考えながら話すタイプなので、TがNNSだからということで特にゆっくり話したわけではないと述べている。話すスピードは個人の持ち味なので、意識して速く話す必要はないが、これもNSSによっては、自分の日本語力が低く評価されていると感じる場合もあるだろう。

その一方で、FUIでTは日本語の間違いがあったら直してほしいという希望をもっていることがわかったが、聞き返しや発音上の訂正はわずかにあったものの、JがTの間違いを直すということはほとんどなかった。しかし何をいつどのように直すかも難しい問題である。

さらに、FUI 4で、協調的なJの会話スタイルをJらしいと評価しつつも、もう少し自分の意見も言ってほしいと感じたという感想が伝えられた。自分のそのような話し方についてはJもよく理解しているようであった。これは話し方だけの問題ではなく、その人のパーソナリティにも関わっているので、理解したらすぐ直せるといった性質のものではないが、4でも触れたように、情報要求や繰り返しの多さ及び、情報提供の少なさが、そのような印象を助長する原因の一つである可能性もある。直ちに直せないものであっても、自分の話し方の印象や、そのような印象を与える理由などを理解することは意味のあることであろう。

5. 考察

FUI 4では、二人ともこの調査を通じて、相手と親しくなれたことがとてもよかったと述べている。お互いの相性や趣味もあるので、いつもこのような活動がうまくいくとは限らないが、今回の調査では、回を重ねるごとに共有する情報が増え、親しさも増していったことがうかがえる。FUI 1及び調査2後の雑談で、Jはこのような国際交流はとても楽しいという趣旨のことを述べている。即ち、その時点でJはTをT個人というよりは、国際交流の相手であるタイの留学生として受け止めていたということになる。

村岡(2003)はNNSが参加する社会的ネットワークのタイプとして、初対面ネットワーク・支援ネットワーク及びプライベートネットワークを挙げ、インターアクションが積み重ねられることによって接触性が弱まり、プライベートネットワークでは、日本人は相手を「外国人」というカテゴリーに属するだけの人間から、やがて固有名詞をもった人間として認知するようになるとしている。今回の調査でもまさに、調査1時点の初対面・留学生支援のネットワークから次第にプライベートなネットワークへと移行していったことが

わかる。

それによって、話題も増え、結果的に沈黙も少なくなるが、仮にポーズが出現しても、ひたすらJが新しい話題を考えるのではなく、Tも積極的に関与して協力して会話を進めるようになっていった。調査4で、Tはその変化を、本当の友だち同士の会話になったと書いている。Jの情報要求とTの情報提供によって片方が聞き役になるだけの一方的な会話ではなく、NS同士と同じように、互いに相手の感情に配慮し合いながら情報を深め合う真のインターアクションへと発展していったと言える。

Hayashi (1991) は単独の会話からなるフロアーを単独フロアーと協同的フロアーとに分け、会話開始時のフロアーは通常単独フロアーであるが、会話参加者がフロアーに参加し出すと、フロアーはより活発となり、次第に協同的フロアーへと変化すると述べている。今回の調査1でのポーズや話題転換の多さなどの数字だけで見ると、この協同的フロアーが十分構築されていたとは言い難い。また、Jが会話を維持するために努力している一方で、Tの方はあまり積極的に話さず、非協力的であると感じられるかもしれない。しかし、実際は会話の雰囲気は調査1の時点でもとてもなごやかで、Tも十分会話に参加しているという印象を受ける。それは、お互いが常に笑顔で、しばしば笑いやうなずきなどの非言語的行動を伴っていることによる面が大きいと思われる。

Coates (1997) は複数の親しい女性同士の会話を分析し、その特徴が複数の参加者の重なり発話や繰り返しその他によって協同で構築される「協同的フロア」であると捉え、その中であいづちや笑いによって実際に発話していなくても、フロアーに参加し続けることができるとしている。男性同士の会話であっても、こうしたうなずきなどの非言語的なあいづちや笑いが特に沈黙などの場面での会話維持に果たす役割は小さくないと思われる。当初はこのような非言語的な面で協調的な雰囲気が支えられていたものが、調査を重ねるうちに、言語的な行動においても協同的フロアーが構築されるようになっていったと言えるであろう。Tの行動及びこの協同的フロアーという観点については稿を改めて詳しく考察する予定である。

今回の調査では、NSの意識や話題の選択、コミュニケーションの進め方など、人間関係の深まりや話題の広がりの中で、次第に望ましい形に変容していったものもあるが、スピードや話し方、理解を助けるコミュニケーションストラテジーの一部はこの時点では改善されていなかった。このように、慣れていくことで自然に、あるいは意識的に改善されていく点もあるし、なかなか気づきにくいものもある。また、相手に対しこうしてほしいと思っても、実際の場面では言いにくい場合もある。しかし、NSとNNSがよりよいインターアクションのために対等の立場で学び合うことを共通の目的としたシチュエーションであれば、このような点について客観的にお互いのコミュニケーションを見つめ、率直に話し合うことができるであろう。

例えば授業で、NSとNNSの会話をビデオで撮ったものを見て、お互いに気づいたことを話し合うというような活動を通じて、接触場面でのNS・NNSのインターアクションにどのような特徴や問題点があるのか、コミュニケーションがうまくいかなかった場合には、それを乗り越えるためにどのようなストラテジーがあるのか、どのようにしたら、よりよいコミュニケーションを行うことができるのかをNSとNNS自身が協働で学ぶことが可能

になると思われる。

今回の調査でも明らかなように、話題の展開やターンの取り方など、NSのコミュニケーションがいつも望ましいとは限らないし、仮に望ましいとしても、それを規範としてそこからNNSのみが一方的に学ぶ必要はない。また、コミュニケーションの規範には多様性があり、ある場面である相手に有効だったストラテジーが他の場面でも有効だとは限らない。しかし、このような規範の多様性を知り、インターアクションが相互作用の中でその都度互いに作り上げていく協働過程であることを体験することにより、その後もNS・NNS双方が教室の外においてもよりよいコミュニケーションを自律的に学ぶ習慣を身につけることができるであろう。

以上のような観点から見ると、NSがNNSにとって日本語学習のリソースであると同時に、NNSもまたNSにとって、単なる英語などの語学力向上や異文化の知識獲得のためだけでなく、多様な言語的・社会言語的・社会文化的規範が存在することを身をもって体験する場を提供してくれる、非常に貴重なリソースであることがわかる。日本では大学の国際化が叫ばれて久しいが、身近なところに留学生という存在があるにもかかわらず、それが十分認識されているとは言い難い^{注5}。ともに学ぶNSとNNSが、接触場面という視点から互いのコミュニケーションを客観的に振り返って、よりよいコミュニケーションのために協力し合い、豊かな人間関係のネットワークを築いていくこと、そしてそれを通じて、多文化社会の担い手として人間的な成長を遂げていくことが何より重要であり、それを自律的に学んでいくことができるような教育プログラムの構築と協働過程達成のための支援が大学等の教育において不可欠であると言えるであろう。

6. おわりに

今回は、Jが予想以上にNNSとの交流があったこと、及びTの日本語力が高かったことで、言語的な面での調整過程の変化は十分観察できなかった。また、あくまで調査対象がNS・NNSそれぞれ1名というケース・スタディーであり、本稿での考察がどれだけ一般化できるかは明らかではない。今後は多様なレベルの学習者に対し、同様な調査を行い、NNSの日本語のレベルによる協働過程の変化の差違についても考察を深めていきたい。本稿はNSであるJの意識面での処理及び言語行動の変化に焦点をあてたものであるが、協働過程の全貌を明らかにするためには、NNSであるTの変化も含めたトータルな考察が不可欠であることは論を待たない。この点は稿を改めたい。今後もこのような調査を積み重ね、NS・NNSのインターアクションを支援するような体系的な教育プログラムを開発していくことが筆者の今後の課題である。

[注]

1. 実際にはNS用とNNS用は別のシートであるが、紙面の関係で今回は一つにまとめ、NSとNNSに違いがある場合は、NS用には 、NNS用には を付した。なお、NNS用には漢字にふりがなをふり、わからない言葉については質問するように伝えた。
2. 一二三 (2002) p48表3-2の項目を数字の若い順に並べなおし、1から45までの番号を振ったものを利用した。

3. 因子の各項目がそれぞれ同じような重みをもっているわけではないと思われるので、パーセンテージでは実態を把握できない面もあるが、あくまで傾向を見るものとしてパーセンテージを示した。
4. ただし、このような用法が実際に丁寧であるとは言えない。
5. 熊井 (2007) 参照。

【参考文献】

- Coates, J.(1997) The construction of a collaborative floor in women's friendly talk. *Conversation: Cognitive Communicative and Social Perspectives*, ed. by T. Givon, pp.55-89. Amsterdam: Benjamin.
- Hayashi, R.(1991) Floor structural of English and Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 16, pp.1-30.
- 一二三朋子 (2002) 『接触場面における共生的学習の可能性』風間書房
- 熊井浩子 (2007) 「接触場面におけるNSとNNSの協働過程に関する考察－多文化共生社会の実現にむけて－」『静岡大学国際交流センター紀要』第1号、静岡大学国際交流センター
- 村岡英裕 (2003) 「アクティビティと学習者の参加－接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために」宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育 ネットワークのインパクト』明治書院
- (2006) 「中国人日本語話者の会話管理 一話順交代時のポーズをめぐる」第9回言語管理研究会配付資料
- (2006) 「接触場面における話順交替時のポーズについて ー中国人日本語話者と日本語母語話者の2者間会話に関する研究ノート」、『人文研究』第35号、千葉大学
- 中井陽子 (2006) 「会話のフロアーにおける言語的／非言語的な参加態度の示し方 ー初対面の日本語の母語話者／非母語話者による4者間の会話の分析ー」『講座日本語教育』42、早稲田大学日本語教育研究センター

【付記】

本稿は筆者が2007年4月より2008年3月までオーストラリアNew South Wales大学のSenior visiting fellowとして滞在した際、2007年7月2日JSAA (Japanese Studies Association of Australia Conference) で行った発表に加筆・修正したものである。

【資料】

氏名 _____ 生年月日 _____ 年 _____ 月 _____ 日

* 次の質問に教えてください。

① 外国人／日本人と日本語で話す経験

・ () 年 () ヶ月ぐらい → 毎月 () 回ぐらい

・その外国人／あなたの日本語のレベル: a.初級 b.中級 c.上級 d.その他

② 今日の会話相手の日本語のレベル (1～5までの1つ中から選んで○をつけてください)

とてもよく話せる 5 4 3 2 1 全然話せない

(日本人と変らない)

／今日の会話相手の話しやすさ (1から5までの中から1つ選んで○をつけてください)

とても話しやすい 5 4 3 2 1 とても話しにくい

③ 会話の録音 (1～5までの1つ中から選んで○をつけてください)

とても気になった 5 4 3 2 1 全然気にならなかった

④ 今日のあなた／相手の会話にあてはまるものがあったら、数字に○をつけてください。

○はいくつつけてもかまいません。

1. 相手／あなたを楽しませようとする
2. 自分の意見は明確に伝える
3. 自分の感情は明瞭に伝える
4. 相手／あなたが話しているときはあいづちを多くしたり、頻繁にうなずいたりする
5. 相手／あなたの感情をすばやく察知するよう努める
6. 相手／あなたと自分との関係を意識する
7. 自分の感情をコントロールする
8. 時々話の流れを明瞭にする (要約したり、要点を整理する)
9. 相手／あなたの意図を推量しながら聞く
10. 具体的に話す
11. 相手／あなたの話に必ず何らかの反応・応答をする
12. 独自の意見を言う
13. 納得いくまで話し合う
14. 論理的に話す
15. 相手／あなたの意見を尊重する
16. 相手／あなたの話がわからないときは聞き返し、わかるまで努力する
17. 相手／あなたがもたもた話していても途中で口をはさまず、最後まで聞いてあげようとする。
18. 言語的な間違いは、話の内容がわかれば直さない
19. 文法的に正しく話そうとする (例.助詞などは省略しない)
20. 丁寧体 (デス・マス調) で話す
21. つまらなくてもおもしろそうに聞く
22. 相手／あなたの言語のレベルを早く知ろうとする
23. 相手／あなたの言語のレベルに応じて、語彙・文法・スピードなどの言語的な調整をする
24. はっきり正しく (標準的に) 発音する
25. プライベートな話題は避ける

26. リラックスした雰囲気を作ろうとする
 27. 相手／あなたの目を見る
 28. にこやかにする
 29. 流行語・俗語などはなるべく使わない
 30. 相手／あなたが理解しているか注意する
 31. 身振り・ジェスチャーを多くする
 32. 表情を豊かにしようと努める
 33. 複雑な内容・背景を多く説明しなければならない内容は避ける
 34. 相手／あなたが知っていそうな話題を選んで話す
 35. 意見が対立しそうな話題は避ける
 36. 相手／あなたが知らなそうな語彙でもあえて使ったりして相手／あなたの語彙が豊富になるような配慮をする
 37. 相手／あなたの内容上の誤りは婉曲に訂正する
 38. 相手／あなたの使った語彙を自分も積極的に取り入れて使う
 39. 自分が理解しているかいないか相手／あなたにはっきり示す
 40. 中立的立場で意見・感想を言う（偏った意見・感想は控える）
 41. 相手／あなたが理解していないようなときはきちんと確認し相手／あなたが理解できるまで努力する
 42. 相手／あなたの言語上の間違いははっきり指摘し直す
 43. 多少理解してもらえなくても気にせず話す
 44. 多少理解できなくても気にせず聞く
 45. わからないときは適宜絵や文字を書いたり、英単語などを使う
- ⑤ 上以外であなた／相手が気をつけていたことがあったら、自由に書いてください。
- ⑥ 今日の会話で感じたことを自由に書いてください。

ありがとうございました。

How the Collaborative Process in Interactions between NS and NNS in a Contact Situation changes over time – with a Focus on NS's Conscious Processes and Behaviors

KUMAI, Hiroko

In order to create improved interactions between NS and NNS, a collaborative process as equal participants is indispensable. The purpose of this case study is to know how NS's appreciation of NNS's performance in Japanese, their conscious processes, and their actual behaviors as language host change over time and how NNS appreciate those changes. The analysis is based on observations of a series of interactions between the same NS(J) and NNS(T) participants and on follow-up interviews etc. Among the J's conscious processes, efforts to support T's comprehension and to prompt T's participation were found to be important factors to the end. However, by the end of the interactions, the factor of emotional control turned out to have a strong impact, just as it does in interactions among NSs. This suggests that after the series of interactions, more attention appears to have been paid to maintaining a good relationship, trying to understand the other's feelings and intentions, just as is found for interactions between NS and NS. In the actual interactions, conversations gradually changed from one-way communication through questioning and answering to real interaction, which is collaboratively managed, taking each other's feelings into consideration. On the other hand, some points did not improve by the end of the interactions, such as J's support through strategic use of T's knowledge of English and Kanji and a perception gap toward his role as a language host, among others. It is necessary for both NS and NNS studying together at university to observe objectively their interactions, working collaboratively toward better communication. It is also necessary for individuals to build a rich network of relationships and through that network to grow as a person who can take an active part in an increasingly multicultural society. It is therefore quite important for educational institutions such as universities to develop educational programs in which individuals can learn autonomously and receive support to achieve this collaborative process.